

国内研修報告書

今回、「民泊を通して地方の観光、町おこしについて学ぶ」をテーマに長崎県小値賀島、出島を訪れ、実際の地方の観光業や、生活について体験し、お話を聞きました。現代福祉学部の授業を通し学んだ地方の町づくりの事例を実際に現地に訪れて自分たちの目で見てみたいという、この一年学ぶ中で感じていたことを、国内研修という形で経験できたことはとても大きな学びとなりました。本レポートでは、今回の長崎県での国内研修で特に私が印象的だった小値賀島で体験したこと、学んだことをまとめていきたいと思います。

私たちは現代福祉学部に入學し、この一年で社会福祉、臨床心理、コミュニティとさまざまなことを学んできました。その中でも私はコミュニティの分野に興味を持ち、まちづくりの思想や、地域問題入門などはとても印象に残った授業でした。そうした授業の中で地方の特色を活かしたまちづくりや、ビジネスを行っている自治体、NPOを学び、画一的なショッピングモールの建設といった開発ではない、個性的な、その地域の魅力を引き出すようなコミュニティづくりというのにとっても憧れを感じました。今回はそうした思いもあり、学部の支援を活用し、独自の観光業を行っている自治体の現状や、課題を自ら体験したいと思い国内研修の参加を決めました。小値賀島を選んだ理由は、島というアクセスのけして良いとは言えない環境で、また周りに五島列島をはじめとしたさまざまな島が密集している中で、どのように独自性を引き出し、観光客を集めているのか、そして少子高齢化が進む中で、観光業に従事する人材の確保、観光が島を支える新たな産業としてどう機能しているのかを学びたいと思ったからです。

まず小値賀島は平成の市町村合併で佐世保市との合併を断り、単独で進むことを決めました。その後、高齢化などもあり、もともとの農業や漁業といった第一産業だけでは島を支えていくことは難しいと考え、今後島を支えていく産業として“観光”に注目しました。観光客を呼び込む上で小値賀島の売りは何かと考え、“人と人のつながり”住民とどのようにつながれるかを意識したそうです。島ということもあり、日帰りでは島を堪能することは難しい、宿の確保もしなければいけないが、今の自然豊かな小値賀島にビジネスホテルは似合わない。そこで注目したのが“民泊”でした。もともと江戸時代、日本が鎖国していた時代に周辺の島では唯一交易を続け、外からの文化も積極的に受け入れていた小値賀島は、昔からさまざまな人が来航し、常に新しい文化を受け入れてきたため、島の住民の

方々も観光客の方々が小値賀島を訪れることにはあまり抵抗もなく、温かく受け入れてくれたとのことでした。しかし、民泊は少し抵抗もありました。もともと小学生を対象に隣の野崎島のキャンパイベントの間の数日、小値賀で民泊をボランティアとして行ってはいたものの、民泊ビジネス、つまりお金が発生してしまうとその分責任も大きくなってしまいうためでした。そこで小値賀アイランドツーリズムの方々は民泊ビジネスを行っている他県に視察に行ったり、勉強を重ね、九州地方から高校性を中心とした若者を200人小値賀に呼ぶことを決め、民泊受け入れ先を一気に増やすことに成功しました。現在では民泊は九州地方の学生を中心に広まり、毎年大勢の若者が小値賀島の生活、人との関わりを求め、訪れている様子が港のターミナル内に飾ってある写真からもうかがえました。一方で、九州以外の関西、関東圏の方にも小値賀の魅力を体験してもらいたい。とターゲットを関西や関東の富裕層に絞り、始めたのが古民家ゲストハウスなどの空き家をリノベーションし、宿泊先として提供するビジネスでした。民泊では完全なプライベート空間を提供することは難しく、また高齢化によって空き家も目立っていたため、外部の方の力も借り、古民家をリノベーションすることを決めました。私たちも実際に古民家ゲストハウスに泊まらせてもらいました。平屋の古風な家で、引き戸、障子、畳、廊下、お祖母ちゃんの家にいるような懐かしさ、あたたかさを感じられるとても素敵なお家でした。

小値賀島の方々はとても温かく、たとえ知らない私たちのようなよそ者でも、必ず町で会えば声をかけてくださりました。島を回っていて感じたことはそうした都会では感じられないと人の距離の近さ、また高齢者がやはりとても多いということでした。小値賀島のこれからの課題は観光に従事する人の減少をどのように解決していくか。また高校の存続を危うくしないようにすることです。まず観光業の担い手に関して、高齢者の多い小値賀では、高齢の方もまだまだ現役で働いているかたも多くいます。観光業には反対ではないが、自分の本業である農業や漁業で島を支えたいというプライドももちろんあり、なかなか観光に携われないという方も多くいらっしゃるとのことでした。また、移住者は年間10人程度受け入れており、産業の担い手として活躍してくださる方や、リタイア後にゆっくりと過ごすために移住するかたもいます。しかし、そうした移住者の方向けの住宅の確保が難しいことも課題のひとつであることが分かりました。高校の存続問題については、現在小値賀では小中高一貫教育をしており、学力も高く、ここ数年では1学年2桁台をキープできている状態です。しかし、隣の宇久島では一桁台の学年もあり、非常に厳しい現状にあるそうです。高校がなくなってしまうということは、子育てをする親は高校で島を離れなければいけない、つまりこの島では子育ては難しいとなってしまうことが多く、一気に少子化、人口減少が加速してしまいます。子育て世代に小値賀島の良さを伝え、小値賀での生活を少しでも長く続けてもらえるよう声掛けを続けていくこともとても大切であることが分かりました。

小値賀島のよさをどのように発信しているのか。現在小値賀島をはじめ、日本各地の島

や秘境、古民家などが流行し、雑誌などのメディアからの取材は相次いでいる状況にあります。しかし、小値賀島での本来の生活をありのままにしっかりと伝えてくれるようなメディアだけに小値賀島の良さを丁寧にお伝えしているというお話を聞きました。

今回の国内研修では、観光を主軸に地域を支えていくことの難しさ、行政の考え方と市民の方々の考えの違い、地方でより魅力を感じてもらいまちづくりの大変さについて自分の目で感じることができました。授業で学んでいるだけの時にはどこか遠い話のように感じていた少子高齢化による町の存続などの問題が今回非常に身近に感じられました。小値賀で現在民泊などを受け入れてくださっている方々の多くは高齢者の方々です。島の中を走っているバスを利用している方もほとんどが70歳以上のおばあちゃんおじいちゃんたちでした。このまま高齢化がますます進み、若い世代が少なくなってしまうと、小値賀の観光の大きな部分を担う民泊業も受け入れることが難しくなっていってしまう可能性があるのではないかと思いました。現在小値賀島への移住を希望する方が多くいらっしゃり、移住者向けの住宅を醜聞に確保することはこれからの小値賀の観光業にもつながることではないかと思います。若い移住者はもちろん、リタイア後に移住される方も島ではまだまだ現役で働ける若い世代です。そうした方々が積極的に島を支える存在になることが、これからの小値賀を支える大きな力になりうるのではないかと感じました。また、子育て世代に小値賀のすばらしさを伝えながら、子どもたちが島にもどってきたいと思えるような環境づくりも非常に大切だと思いました。

今回長崎権の小値賀島に実際に訪れに日常では体験できない素晴らしい体験をさせていただきました。今回の経験をいかし、2年以降の学習では、コミュニティマネジメントの分野で日本各地のまちづくりについて学んでいきたいと思いました。また、長崎市街を観光している間に感じたのは海外の観光客の方の多さです。海外から来られる観光客の方にも日本の各地の暮らしを伝えるにはどうしたらいいのかということも今後学んでいけたら良いなと改めて感じました。